

## 負傷

### 広州湾進攻 陽動作戦

兵庫県 西村 正

その日は、昭和十八（一九四三）年二月十一日、二十四時頃であった。所は、南支那広東省鶴山県坡山付近である。

紀元節の佳日を卜しての行動開始である。広東省の日本軍は第二十三軍であり、兵力は一個師団と独立混成旅団三個という少数兵力であった。海南島は既に我が軍の占領するところとなっていたが、これに接する広州湾は未占領であり、対仏領印度支那に対し重要な拠点でありました。

これに対し独立混成第二十三旅団が攻略するため、我々独立混成第二十二旅団が、広東市、南方より掩護するため起こした陽動作戦でありました。陽動作戦とは敵の判断を誤らせるために、あ

らわに行動して敵の注意をそれに向けさせるための作戦であった。我々の部隊が北から南へ行動することにより、敵兵力を南北に分散させる。これにより、独立混成第二十三旅団の広州湾攻撃を成功させるという作戦でありました。

我が部隊は、広東省、珠江の支流西江の北岸の九江に終結して、行動発起の命令を待つておりました。二十時集合、碼頭で乗船を終了したのは、かれこれ二十二時頃だったと思う。

月は、折からの黒雲に遮られて見えなかったが、さながら銀蛇を流したように西江は真つ暗な対岸をくつきりと浮かび上がらせ、嫌が上にも敵懐心を煽り立てている。

南支那といえども、二月二十一日は、未だ冬の季節の深夜、寒さが身に凍みる。各舟艇は暗闇の江上を音もなく滑って行く。江の三分の二位に来た時だった。突如、前方に物凄い銃声が起こる。南岸に行く尖兵の本田隊が発見されたい。流

れ弾が頭上を鈍い音を立てながら飛んで行く。

「姿勢を低くしろ」と命ずる。こんな所でやられては馬鹿くさい、じつと、前方を睨み付けながらなお舟を前進させる。陸へ揚がってしまえば、もうこつちのものだ。是が非でも無事上陸し了えねばならない。

やがて、銃声が止んだと思つたら、遙か彼方に上陸成功の信号弾が夜空に明るく輝き渡つた。

ほつとしながら、舟艇を斜め右方に向ける。夜のことで、昼間あれほどよく見ておいた上陸地点がどこだか分からない。暗記しておいた地図を思い浮かべながら、なお右へ右へと舟を操る。

中隊長と私は共に艇首に腰を降ろして、じつと前方を凝視しつつ、一言も発しない。鉄帽だけが鈍い光を放っている。やつと、それらしい三角州が見えた。「あれらしいですね」と私がいうと、中隊長は「うーむ」。

もう後、五、六十メートルばかりの時だった。左方向で、中国人の「誰何！」に似た叫び声がし

た。発見されたか？と思つた時は遅かつた。左手の小山から、チェッコ式軽機関銃の猛射だ。距離は一五〇メートル程か、近さは近い。水中に浮かんだ小舟だ、よく、この舟が見えるに違いない。「バチ、バチ」と舟のどこかに当たる音がする。「近いぞ、伏せろ！」。

我が兵は、狭い舟の中で皆、目刺のようになつて折り重なつた。中隊長は「狙撃手に射撃せよ」と言う。私は兵に怒鳴つた。「舟の縁の者。あの山を撃て」。慌てた奴が、伏せたままで舟の中から一発、ぶつ放した。

伊藤軍曹が「誰だ、危ない、舟の中から撃つ奴があるか」と言つて怒っている。

私は、更にこの時、重機関銃に命じた。「重機、早くあの山を射ち上げろ」。

舟が停まつたので、叱り付けてやろうと思つて後を見たが、中国人の船頭はどこへ潜つてしまつたのか姿を見せない。

とにかく、味方は漸く撃ち出した。あの舟も相当騒いでいるようだ。これより先、私は何かしら左脚の付け根の当たりにシヨックを感じた。

ちよつと、傍らの者が、突いたぐらいいだ。……間もなく生暖かいものが腰の辺りに流れたように感じられるので、傷られたかな！ とは思ったが、痛くも何でもない。

やがて重機関銃の猛射は山上の敵火器を制圧し始めた。「ざまあみろ」と思いながら、伏し直そうとした途端！「グキーン」ときた。「チツチ……」思わず口をついて出た。「畜生、やりやがったな」そつと腰の辺りを撫でてみる。

生暖かいヌルリとした奴がベツトリとして手の指に張り付く。今まで張り詰めていた気合いも一ぺんに消し飛んでしまった。「衛生兵！ 衛生兵！」「負傷だ来てくれ」、後の方で「どこですか、誰ですか」と言っている伊藤衛生兵の声が聞こえる。銃声も止んで中隊は上陸を完了する。

「中隊長殿、申し訳ありません」私は口惜しく涙が出た。「何を言う、早く後退して大事にしろ」。

私は「伊藤軍曹（先任下士官）、後を頼むぞ」「小隊の者もしつかりやってくれ」と預かっていた地図、作戦計画を見習士官の飯田に手渡す。「しつかり頼むぞ」「やってきます」。私は伊藤衛生兵の治療を受ける。舟に残ったのは、私と当番と伊藤衛生兵と中国人の船頭だけだ。

私は、ちよつと憂鬱になった。夜空を仰ぎながら、とりとめもなく瞑想に耽つていた。……左大腿部、貫通はしているようだ。生命に別状ないらしい。しかし動く痛みと痛むところをみると骨折しているようだ。脚でも切断しなくてはならないようなことになるのじゃあるまいか、もし、そんなことにもなるなら、生き恥をさらすより、むしろ死を選べ！ と平素の考えが浮かんでくる。ここで自殺をしても、せめて戦死ぐらいにはしてくれらるだろう。私は秘かに拳銃を握りかけた。

しかし、衛生兵は頗る軽いようなことを言う。「血管は外れているようですし、神経も傷られてはいない。骨折は何とも言えませんが、どうせ二、三カ月もすれば元通りに治ってしまいますよ」と言う。私は、衛生知識のない悲しさ「そう言われれば、あるいはそんなものかな」と思う。まあそんな酷いことはないかも知れないなあ！なんて思い出した。不安は去らない。

九江仮収容所に収容される。ここで図らずも、中山県石岐時代、面識あつた鈴木軍医少尉の治療を受けることになった。足の裏で止まった弾丸を摘出して貰う。治療の終わったのは午前二時頃だろ。

負傷者はもう一人いた。同じように上陸する前、舟の中でやられたと言う本田隊の兵隊で、腹部貫通銃創で苦しんでいた。

私は、傷そのものはいって痛いとは思わなかったが、体や脚を動かされるのがたまらない苦痛だった。担架の乗り降りは、言われただけで

も恐ろしい気がした。「ぐきーン、ぐきーン」と音の出そうな痛みがするのだ。

翌朝早く、仏山野戦病院に後送されることに決定したので、軍医の心尽くしの「片栗」に舌づつみを打ち、漸く仮睡したのは、かれこれ四時半頃でもあつたらうか。

#### 仏山野戦病院

自昭和十八年二月十二日 至十七日

針金で作った副木をつけて貰って、やっと移動も楽になった。レントゲン撮影の結果、右大腿部になお弾片が五、六個残っていることが判明する。

部隊から、毛利軍医が部隊長代理として見舞に来てくれる。この時初めてガダルカナル島の転進を聞いた。毛利君と随分悲嘆したことであつた。

広東野戦病院 波第八六〇〇部隊

自昭和十八年二月十七日 至三月十七日

香港野戦病院

自昭和十八年三月十六日 至三月二十五

日

病院船「ぶえのすあいれす丸」

自昭和十八年三月二十六日 至四月二日

広島陸軍病院第一分院

自昭和十八年四月二日 至四月十日

広島陸軍病院 本院

自昭和十八年四月十五日 至五月十一日

美まし国かな わが皇国は

誰がために 贈る花ぞも わが病室に

みしらぬ乙女の 置きてゆきたる

君のため 捧げし脚を かがみにて

生命のかぎり 生きてゆくべし

かえりみて おもふことなし 兵たちと

共にくらし 三年なりせば

皇国の 大き歩みの ひしひしと

身に沁みるかな ラジオききつつ

【短歌】 病院船く以降 一日一首 計六十余

首

浜千鳥 いく千代かけて 告げよかし

大和男子の 樹てし功績を

澄みし空 みどりの島山 蒼き海

春の雨 しとしとと降る 病室に

微かに聞こゆ 尺八の音

流れゆく 雲のまにまに 身をのせて

生命はてなば のどかならまし

銀翼を きらめつかせつつ 千ぎれ雲

流るるあたりの 空ぬひゆけり

あたらしき 護国の英霊 祀ります

けふのよき日を 慎しみくらす

大君の 御艦詫びつつ 従容と

太平洋に 神鎮まりぬ

朝まだき 廊下伝ひて 看護婦の

歌声かそかに 渡りくるかも

かえりきて 破れし病衣の つくろいに

きびしき祖国の 姿をぞ見る

天のした 牢としなさん その日まで

いやつぎつぎに 生命ささげむ

いつとなく あの感激の うすれゆく

わが身思えば はがゆかりけり

傷つける 身は露ほども 悔いねども

戦進むを みるがかなしき

面会の 人もなき夜は 夜もすがら

故郷のことも 思い出つるかな

手術せし 友の痛みも とれたるか

かるきいびきに 夏の夜更くる

### 南支戦線 運の別れ目

#### 初年兵から馬と共に

神奈川県 森 道一

人間誰しも過去がある。それが暗いか、ピンク色に彩られたかは人により、運命により、考え方により異なっているであろう。その軍隊体験を語